

## ヴァージニア・ウルフ「自分と同種のものが好きな男の話」 (『幽霊屋敷』から)

A Translation of Virginia Woolf's "The Man Who Loved His Kind"  
from *The Haunted House* (1945)

坂 本 正 雄  
SAKAMOTO Masao

2002年10月3日受理

その日の午後、ディーンズ・ヤードを馬車で駆けていたとき、プリケット・エリスはリチャード・ダロウェイに出くわしました。というよりは、ふたりがすれ違うとき、帽子の下から、そして肩越しに、それぞれがそっと横目遣いに投げかけた目が大きく広がり、そしてはっと認めあったのです。二十年ぶりでした。学校が一緒でした。で、エリス、きみはどうしてる。裁判所かい。もちろん、もちろん、事件のことは新聞でずっと読んでるよ。でもここで話すのは無理だよ。晩に立ち寄らないかい。(住所は前と同じだった。角を曲がったところ)。ひとりかふたりは来るよ。ジョイスンもたぶんね。「いまじゃ、大したご名士さ。」リチャードが言いました。

「うん、じゃあ今晚。」リチャードが言いました。それからその変わった男に会ったことが「たいそううれしかったよ」(実際本当のことでした)と言って、道を進んでいきました。あれは学校にいた頃とちっとも変わっていないな。あのころもまるぼちゃで小さくて、頑固だった。思いこみが激しく、体中から棘が飛び出していた。でも非凡なくらいに聡明で、ニューカッスル賞をとったっけ。そうだ、そうだ。リチャードは駆けていきました。

でもプリケット・エリスは振り返って、ダロウェイが消えるのを見ながら、会わなければよかった、あるいは、ダロウェイの人となりは以前は気に入っていましたが、少なくともパーティに行く約束をしなければよかったと思いました。ダロウェイは結婚していて、パーティをよく開いていました。自分の趣味に合う人間ではなくなっていました。正装もしなくてはならないし。でも夕刻が近づくにつれ、自分でも言ったように、それから失礼をしたくもないと、行かなくてはと思いました。

でもなんてひどい宴会だろう。ジョイスンが来ていました。話すことはお互い何もありませんでした。子供の頃は気取ったやつだった。今はもっと尊大なやつになっている。それだけだ。プリケット・エリスが知っているものは部屋にはほかにいませんでした。ひとりも。ダロウェイは白のベストを着て、忙しく客をもてなさなくてはいけないようでした。一言も声をかけずに去る

わけにもいきませんでしたので、プリケットはそこにじっとしてはなりません。それは嫌悪感を催させるものでした。責任ある、いい大人が、人生の毎晩々々をこんな事で過ごしているなんて。プリケットはすっかりふさぎ込んで壁にもたれました。青々とした剃り跡の残る赤い頬に、しわが深く浮き出ました。馬みたいに働いてはいるものの、運動をして身体はいい調子にしているぞ。口ひげを霜のなかにつけ込んだように、プリケットの顔はきつく厳しいものになりました。いらだち、腹が立ってきました。貧相な、その礼装のために、あか抜けしない、さしたる人物でもない、無骨な姿に見えました。

怠惰、おしゃべり、着飾り、頭の中には何ら考えもない。これらすばらしい紳士淑女の皆さんはしゃべり、笑い続けました。プリケット・エリスは彼らを見続け、ブラナー夫妻と比べました。夫妻はフェナー酒造との訴訟に勝って、二百ポンドの賠償金（それは当然手に入れるべき額の半分にもならなかった）を手に入れたとき、そのうちの五ポンド〔訳注：1923年当時の£1は1990年の£23.20の価値があるとされる〕で時計を買い、プレゼントまでしてくれたのです。これこそ立派なふるまいというものだ。これこそ人を感動させる振る舞いというものだ。そしてプリケットは前にもましてきびしく目の前の人たちをねめつけました。着飾って、いやみったらしく、金のあるものども。プリケットは、今感じていることとその日の十一時に感じたこととを比べました。ブラナー夫妻は一番いい服を着て、とても立派で身だしなみのよい老父婦でした。ふたりはわざわざ立ち寄って、まっすぐきちんと立って挨拶を述べ、そのささやかな記念品、老人の言葉でいえばだが、あなたがわれわれの訴訟を指揮してくれた立派なやり方に対する感謝と尊敬の、記念品を渡してくれたのです。ブラナー夫人は不意に声を張り上げ、みんなあなたのおかげだと思っていると仰いました。そしてふたりはプリケットの寛大さに深く感謝していると仰いました。というのもプリケットは、当然の事ながら、手数料を受け取らなかったのです。

それから時計を受け取って、マントルピースのまん中に置きながら、誰にも今この顔を見られないようにと仰っていました。それこそが彼の仕事の目的でした。それこそ自分への報酬でした。そして今、目の前にいる人たちを見ました。彼らはまるでプリケットの事務所で起きた出来事と二重うつしになって、踊り回り、そのために素性があらわになっているようでした。そしてその場面が消え、ブラナー夫妻も消えて、その残り物のようにプリケット自身がこの気性の異なった人々に敵対して残っているのです。何の変哲もない、あか抜けしない男、ひどい格好（プリケットは背筋を伸ばした）、気取りも優雅さもなく、ねめつけている、自分の感情を隠すことの手先の男、平凡な男、悪や腐敗、社会の非情に対抗する普通の人間。でもにらみ続けることはしない。で、プリケットはめがねをかけ、絵を子細にみつめました。一列に置かれた本のタイトルを読みました。大部分が詩集でした。自分だったら昔からのお気に入り、シェイクスピアやディケンズをまた読みたいと思いました。ナショナル・ギャラリー〔訳注：1838年開設、LondonのTrafalgar Squareにある国立美術館〕に立ち寄る時間があつたらと思いましたが、でもそんなことは無理だ。いや無理だ。本当にできない。今、世界がこのような時期にあつては。ひとびとが日がな一日おまえ

の助けを求めている、いや口やかましく要求している時には無理だ。今は贅沢の時ではない。それからプリケットは、肘掛けいす、ペーパーナイフ、それからきれいに装丁された本をみて、首を振りました。そうした贅沢を自分に許す時間もなければ、思い切ってやったとしてもうれしいとも思えないだろう。そうわかっていたのです。目の前の人たちは、たばこにわたしがどれほどの金を払っているかを知ったら、びっくりするだろう。服を借りてきたことにもびっくりするだろう。プリケットの唯一のぜいたくはノーフォーク・ブローズ〔訳注：湖沼地帯〕に浮かべる小さなヨットでした。それが自分に許していることでした。一年に一度プリケットはみんなから逃れ、野原に寝そべるのが好きでした。どれだけの楽しみを、プリケットが古風にも自然愛と名付けたもの、子供の頃から知っている木々や野原から得ているかを彼ら、この目の前のすばらしい御仁たちが知ったらなんと驚くだろうかと思いました。

目の前のすばらしい人たちであれば、驚くだろう。実際、めがねをしまっ、そこに立っていると、プリケットは自分が一瞬ごとに人をますますびっくりさせる存在になっていくのを感じました。それは非常に不愉快な感じでした。プリケットはこのこと、自分が人間を愛していること、たばこに五ペンスしか遣わないこと、それから自然を愛していること、こういうことをごく当たり前に、また心静かに感じたわけではありませんでした。これらの喜びひとつひとつはもう反抗の精神に変わってしまっていました。軽蔑するこれらの人たちに身ぐるみはがれ、弁明させられているように思いました。「わたしはただの凡人ですよ。」プリケットは言い続けていました。それからつぎに自分が言った言葉にほんとうに恥ずかしくなりました。でもそうやってしまったのです。「わたしはあなたたちが一生かかってやる以上のことを仲間のために一日で成し遂げてきたんですよ」。たしかに自分でも押さえきれなかったのです。ブラナー夫妻が時計を渡してくれたときのような場面をつぎつぎと思い返していました。ひとびとが自分の人間性や気前の良さ、それからみんなの役に立っていること、について言っただけでいろいろなすてきなことを思い出していました。プリケットは自分が人間というものに対する、賢明で寛容なるしもべであると思いつづけていました。そして自分への贅辞を声高に言えたらと思いました。自分のよさを自分ひとりでふつつつと感じたままにしておくのは不快なものでした。それから自分に対するひとびとの贅辞をだれにも伝えられないのはさらに不快なものでした。ああ、プリケットは言い続けました、明日は仕事に戻らなくちゃいけないんです。でも部屋を抜け出して家に戻るだけではもう満足できませんでした。ちゃんとここにいて、自分の立場を説明しなくては。でもどうしたらできるだろう。人でいっばいのその部屋のどこにも、話しかけることのできる知り合いはいませんでした。

リチャード・ダロウェイがようやく近づいてきました。

「ミス・オキーフを紹介するよ。」リチャードは言いました。ミス・オキーフはプリケットの眼をまともに見つめました。三十年代にはやったかなり横柄でぶっきらぼうな態度の女でした。

ミス・オキーフは氷か飲み物をほしいと言いました。そしてプリケット・エリスには言い訳もできないほどの傲慢な態度で氷をくれるように頼みました。それは、その暑い日の午後、だいたい

貧しそうで、だいぶくたびれたひとりの女と二人の子どもが広場の手すりに身体を押しつけ、じっと中をのぞき込んでいたのを見たからでした。広場に入れてやれるかしら。わたしそう思ったのよ。哀れみが波のように起ったのよ。怒りも煮えたぎったわ。できないわ。つぎの瞬間には、自分の耳を乱暴に殴るみたいに自分を責めたのよ。世界中の力をもってしてもできないわ。それでテニス・ボールを拾い上げ、それを投げ返してやったのよ。世界中の力をもってしてもできないわ、ミス・オキーフは怒りを込めて言いました。そういうわけでミス・オキーフは誰も知らない男に命令口調で、ものを言ったのでした。

「氷をちょうだいな。」

ミス・オキーフが氷を食べてしまうまで、プリケット・エリスはすぐそばに立って何も食べずにいましたが、自分がもう十五年もパーティには出ていないことを言いました。礼服も義弟に借してもらったのだと言いました。この種のことは嫌いなのだと言いました。そして自分がたまたま凡人に親しみを感じている、無骨な男であると言いつづけていたら大きな気休めになっていたでしょう。そうしたらブラナー夫妻と時計のこともしゃべっていたでしょう（後で後悔したでしょう）が、ミス・オキーフは言いました。

『『テンペスト』は見ました?』

それから（プリケットは『テンペスト』を見ていませんでした）「本はお読みなつて。」また「いいえ。」さらにそれから氷を下に置いて、「詩はお読みになりませんの。」

するとプリケット・エリスは腹の中に、この女の首をちょんぎって、生け贄にし、むちゃくちゃにしてやりたい気持ちがわき起こってくるのを感じ、そこに座らせました。ふたりは誰もいない庭の、誰も声をかけてこないところで椅子に座りました。みんなは二階にいました。芝生をこっそり横切る一、二匹の猫、震える木の葉、提灯のような、あちこちと揺れる、黄色や赤の果実にあわせて鳴る、気の狂った幻のオーケストラのようなぶんぶん、ぶーん、ぺちやくちゃ、ちりんちりんという音が聞こえるだけでした。おしゃべりは現実の苦しみでいっぱいのものに向かう狂った骸骨踊りの音楽のようでした。

「きれいだよ。」ミス・オキーフが言いました。

ああ、きれいだよ。芝生のこの一区画。ウェストミンスター寺院の塔がまわりに黒いかたまりとなって、客間の背後に高くそびえていました。騒音の後では静かでした。結局、あの人たちは、疲れ切った女と子供だけど、それを持ってったわ。

プリケット・エリスはパイプに火をつけました。彼女、びっくりしてるだろう。刻みたばこを詰めました。一オンス五ペンス半だ。プリケット・エリスはたばこを吸いながらボートに寝そべりたいと思いました。自分の姿が見えました。ひとりでした。夜、星空の下でたばこを吹かしていました。というのも今夜、もし客人たちが彼のほうを見るものがあれば、自分がどのように見えるかをいつも考え続けていたのでした。プリケット・エリスは長靴の底でマッチを擦り、ミス・オキーフに言いました。ここにはきれいなものは特に見つかりませんよ。

「たぶん。」ミス・オキーフは言いました。「美というものに関心がおありにならないのね。」(プリケットは『テンペスト』を見ていない、本も読まないと言ってしまっていました。だらしない格好でした。口ひげだらけ、あご、銀の時計鎖。)ミス・オキーフはこうしたことによって一ペニーだって払う必要はないのと思いました。美術館はただだし、ナショナル・ギャラリーも、それから田舎も。もちろん反対のことだって知っていました。洗濯、料理、育児。でも物事の根っこはみんな口に出すのが怖いことだけれど、幸福というのはばか安なものなのよ。ただで手に入れられるわ。美というものはね。

それでプリケット・エリスはミス・オキーフ、この青白い、ぶっきらぼうで、横着な女にその美を味わわせました。刻みたばこを吹かしながら、プリケット・エリスはその日にしたことをしゃべりました。六時に起きて、いくつもの面談、汚いスラム街の下水のにおいをかぎ、それから裁判所に行ったこと。

ここでプリケット・エリスはためらいました。自分自身がしたことを少ししゃべりたいと思いはしましたが。その気持ちを抑え、それゆえに辛辣になりました。プリケット・エリスは言いました。太った女、着飾った女(ミス・オキーフは唇を引きつらせました。彼女はやせて、服装は基準以下でした)が美のことを口にするのを聴くと吐き気がしてくると言いました。

「美か。」プリケット・エリスは言いました。人間自体から離れたところにある美は自分には理解できないと思うと、言いました。

それでふたりは灯りが揺れている、誰もいない庭を見つめていました。一匹の猫が真ん中で立ち止まり、しっぽをあげました。

人間から離れたところにある美ですって。それ、どういう意味ですの。ミス・オキーフは突然詰問口調になりました。

ええ、これは。ますます興奮してきて、プリケット・エリスは自慢も隠さずに、ブラナー夫妻と時計のことを話しました。こうしたことが美なのですよ、彼は言いました。

ミス・オキーフのほうには、この男の話がかき立てた恐怖を言い表す的確な言葉がありませんでした。まず、この人のうぬぼれ、それから人間の感情についてしゃべるときの節度のなさ。冒涇にも等しい。この世のだれも自分と同種の間が好きであることを示す話をすべきではないわ。でも彼が話すにつれ、その老人は立ち上がり、挨拶をし始めたことを話すにつれ、涙が目にあふれてきました。ああ、だれかがそれをミス・オキーフに言っていたら。でもまたミス・オキーフは人間を永久に運命づけるのはまさにこれだわと思いました。時計などでは感動的な出来事を超えたところにあるものにはたどりつけない。プリケット・エリスに挨拶を述べるブラナー夫妻でも、このプリケット・エリス種の間でも、いつも自分と同種の間を好きだと言い続けるのだ。いつも怠惰で、すぐに妥協し、美というものが怖いのだ。ここから革命が起こるのだわ。怠惰、恐怖、感動的な出来事を求める心から、それでもこの男は自分のブラナー夫妻で喜びを得ている。そしてわたしは、広場から閉め出された貧しい貧しい女たちのことで永久に苦しむよう運命づけ

られた。それでふたりは黙って座っていました。ふたりとも惨めでした。プリケット・エリスは自分が言ったことでちっとも元気づけられませんでした。ミス・オキーフのとげを抜く代わりに、こすり入れてしまいました。今朝のうれしい気持ちはだめになってしまいました。ミス・オキーフは頭がぼうっとして、いらだっていました。頭がはっきりするでなく、わけが分からなくなっていました。

プリケット・エリスは言いました。「わたしは、自分と同じ種のもを愛する凡人のひとりだと思う。」

それを聴いて、ミス・オキーフはもう少しで声に出すところでした。「わたしもよ。」

お互いを忌み嫌い、このつらい、この現実を見せてくれる夜を二人に与えてくれた、家いっばいに入った人々を嫌い、これらのふたり、自分と同じ種のもを好きなものたちは立ち上がり、一言も交わさずに永久に別れたのでした。